

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12421

研究課題名（和文）北海道ガーデンツーリズムに関する研究－英国との比較から

研究課題名（英文）Study on Hokkaido Garden Tourism: Comparative study with U.K.

研究代表者

田代 亜紀子（Tashiro, Akiko）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：50443148

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、2020年～2023年のうち北海道内庭園20カ所、道外11カ所、英国3カ所の庭園において調査を実施した。コロナ禍であったため、英国調査は2023年の一度にとどまった。しかし、北海道内庭園での調査により、北海道ガーデンにおける庭園の在り方（形態・機能・所有管理等）が本州の庭園とは大きく違うこと、イングリッシュガーデンという様式での造園が多いながらも、北海道ガーデンというべき独自の様式を創り出していること、観光との親和性が高いことなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、北海道観光における「景観」と「庭園」の位置づけが、本州における庭園観光とは違う歴史的背景に基づいて展開していることを明らかにした。国土交通省が展開するガーデンツーリズムの推奨は、その歴史的背景の違いから、北海道ガーデンでは適応されやすいが、逆に本州においては限られた庭園にのみ適応される施策であると考えられる。また、イングリッシュ・ガーデンとして強調される北海道ガーデンは、独自のスタイルを創り出していることがわかっている。

研究成果の概要（英文）：The research was conducted in 20 gardens of Hokkaido, and 11 gardens of main island of Japan. Besides, 3 gardens in U.K. were visited in 2023 while it was difficult to conduct research from 2020 to 2022 because of Covid. The study revealed that gardens in Hokkaido had developed their own style as Hokkaido Garden even though gardens were promoted as English garden. Also tourism had deeply affected its own style, as Hokkaido Garden. On the other hand, horticulture had developed differently in Hokkaido island which exhibit on Hokkaido Garden.

研究分野：観光研究

キーワード：ガーデンツーリズム 英国 北海道

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

分担者として参画した基盤研究(B)「歴史と現状からみた庭園の観光資源としての可能性に関する研究 - 欧州との比較から」(2014-2017、研究代表者:小野健吉)においては、2015年から2017年に「観光資源としての庭園」に関する研究会が3回開催され、その成果は、『観光資源としての庭園(1)』『観光資源としての庭園(2)』として刊行されている。研究では、英国における庭園の観光資源としての活用に関する調査を分担し、大英図書館、ヒストリック・イングランド附属図書館などで資料調査を実施すると同時に、英国内の歴史庭園15庭園で調査を実施してきた。その結果、鑑賞を主眼とした空間としての庭園に限定するのではなく、庭園という空間に関わる様々なものや行動を観光資源と考えることが必要だとの着想に至った。また、研究会において他の研究者から報告される本州における庭園と観光の事例と比較し、北海道では、冬季に庭園が閉まること、英国式庭園と称される庭園が多く存在していることなど様々な本州との差が浮かび上がると同時に、英国のNGSの活動から影響を受けた市民の個人庭園公開などの動きがみられるなど、興味深い点が見られた。このため、これまでの研究を発展させる形で、北海道ガーデンツーリズムに焦点を当てた研究を行ったのが本研究である。

欧米において展開するガーデンツーリズムと日本における歴史庭園の観光活用は、庭園と公園という歴史の変遷の違いからもわかるように、その発展の違いが明らかな一方、観光の拡大に伴う刊行行政による観光・公園の活用は、同じ政策を用いている。日本における庭園観光は、これまで、本州を中心とした歴史庭園を対象とした検討がされてきたが、北海道で、展開されているガーデンツーリズムを対象とした庭園活用と観光の関係を考察することは、魅力的な観光地形成施策への新たな視座を与えられるのではないかと考え、本研究を実施した。

2. 研究の目的

本研究は、北海道におけるガーデンツーリズムを対象として、観光学の立場から庭園の在り方(形態・機能・所有管理等)と観光の相関性を考察することを目的とする。また、英国における歴史庭園の保存活用と、市民による庭園公開などのガーデンツーリズムの発展に対する現地調査を行うことで、その比較研究からガーデンツーリズムの国際的枠組みを明らかにする。本研究では、日本で独自の発展を続ける北海道ガーデンツーリズムに注目し、国際競争力の高い魅力的な観光地形成施策に資することを旨とする。

3. 研究の方法

本研究では、主に北海道ガーデン街道に組み込まれている8つの庭園を中心に北海道内の庭園を対象とした。この8つに組み込まれていない国指定文化財庭園である旧岩船氏庭園(香雪園)をはじめ、他の庭園も対象に庭園の在り方(形態・機能・所有管理等)と観光の相関性を考察した。また、英国においては、イングランド、ウェールズ内の庭園、植物園、公園の連携と観光戦略について検討した。

4. 研究成果

北海道内の庭園20か所、道外(主に関西)の庭園11か所を対象に、庭園の在り方(形態・機能・所有管理等)と観光相関性を考察した。特に、北海道ガーデン街道の対象である8ガーデンは、開園されるゴールデンウィークから、閉園する秋10月頃まで複数回、季節と時間、週末や平日と分けて訪問することで、庭園のルート構成と訪問客数、カフェ利用などを観察した。8ガーデン以外には、帯広・十勝地方、札幌近郊、旭川、富良野におけるガーデン、観光スポットとしての景観(美瑛四季彩の丘、富良野ファーム富田、富良野カンパーナ六花亭)を訪問し観察した。2022年には造園学・小野健吉(大阪観光大学)、2023年には造園学・マレスエマニュエル(京都産業大学)、景観の恵谷浩子を北海道に招き、造園・景観の立場から北海道ガーデンを共同調査し、主に本州の庭園観光との違いを検討した。また、本州においては、奈良と京都を中心とした関西で庭園の状況と観光の相関性についての調査を実施した。なかでも、旧大乘庭園、平城京左京三条二坊宮跡庭園、平城宮跡東院庭園は、考古学的発掘により明らかになった復元庭園であ

り、復原された名勝庭園と、醍醐寺、平安神宮、二条城、南禅寺、無鄰菴、依水園との比較を試みた。浄瑠璃寺は、庭園と部分的復元の融合として事例調査の対象としている。神戸の布引ハーブ園は観光スポットとして、ハーブ園、イングリッシュ・ガーデン、レストラン、カフェの展開など、本州における北海道ガーデンと類似した経営戦略として研究対象とした。

比較対象の英国調査は、1年に1～2回を予定していたが、コロナ禍により、最終年度1回のみの実施となった。また、国際研究協力者 John Watkins(English Heritage)の日本招へいを予定していたが、Watkins 氏の病により叶わなかった。2023年9月の英国調査では、Watkins 氏を訪問し、English Heritage の管理する Chiswick、Marble House の庭園と管理について、また、英国でも最古の植物園であるオックスフォード大学植物園を訪問し調査を実施した。

表1．日本国内において調査を実施した対象庭園一覧

北海道内			本州	
真鍋庭園	帯広市	北海道ガーデン街道	平安神宮	京都
十勝千年の森	清水町	北海道ガーデン街道	二条城	京都
紫竹ガーデン	帯広市	北海道ガーデン街道	浄瑠璃寺	京都
十勝ヒルズ	幕別町	北海道ガーデン街道	南禅寺	京都
風のガーデン	富良野市	北海道ガーデン街道	無鄰菴	京都
上野ファーム	旭川市	北海道ガーデン街道	醍醐寺 三宝院庭園	京都
大雪 森のガーデン	上川町	北海道ガーデン街道	平城宮跡東院庭園	奈良
六花の森	中札内村	北海道ガーデン街道	旧大業院庭園	奈良
イコロの森	苫小牧市	私設	平城京左京三条二坊宮跡庭園	奈良
十勝ヌックガーデン	帯広市	私設	依水園	奈良
ユニガーデン	由仁町	私設	神戸布引ハーブ園	神戸
えこりん村	恵庭市	私設		
陽殖園	滝上町	私設		
中札内美術村	中札内	私設		
大森ガーデン	広尾町	私設		
香雪園(旧岩船氏庭園)	函館市	国指定名勝		
忠類 道の駅	幕別町	道の駅		
にしおこっぺ花夢 道の駅	西興部	道の駅		
花ロード えにわ 道と川の駅	恵庭	道の駅		
香りの里ハーブガーデン	滝上町	滝上町		

研究対象とした道内 20 庭園、道外 11 庭園、英国 3 庭園において、2022 年～2023 年は陽殖園（滝上町）を調査対象として絞り、参与観察とインタビュー調査を実施した。陽殖園に対する調査は、陽殖園をとりあげたメディア（NHK『猫のしっぽ、カエルの手』、婦人画報、フィガロ）、陽殖園を造り上げた高橋武市およびリピーターとしての訪問客を対象としている。陽殖園は、滝上町に位置する渓谷ホテル、観光協会と協力し、継続的に訪問客の招集を試みている。リピーターは東京首都圏、関西圏から多くあり、数年にわたり陽殖園を訪問している。また、自然に近い観光庭園として、「イングリッシュ・ガーデン」としてないものの、景観としては、英国の風景式庭園に非常に近い。北海道ガーデンの特徴を把握すると同時に、どのようにして何度も同じ庭園に観光客が訪れるのか、本研究では、北海道ガーデンの特徴を道外庭園と比較して明らかにしたうえで、道内 20 庭園のうち陽殖園をとりあげ、リピーターに対する調査およびフォローアップ調査を実施した。

1) 北海道ガーデンにみる特徴

北海道ガーデンの第一の特徴は、そのほとんどが戦後に造られたものであることである。国指定の名勝とされている香雪園(旧岩船氏庭園)を除けば、古くて 1960 年代の造園となる。故に、ほとんどの庭園は、現役の庭師により造られたものであるため、そのメンテナンスも造園した設計者が関わっていることがほとんどである。十勝千年の森、えこりん村は、チェルシーフラワー賞で受賞している国際的なランドスケープ・アーキテクトに依頼している庭を有しており、このため、メンテナンスは非常に厳しい基準をクリアしていく必要がある。

また、もうひとつの特徴として、園芸との密接なつながりがある。本州でも神戸市布引ハーブ園はその代表だが、北海道ではほとんどのガーデンで園芸種の販売が行われている。特に、上野ファーム、真鍋庭園、イコロの森、大森ガーデンなどは、もともとは造園業が主であり、庭は、その展示場的な役割が大きい。北海道ガーデンは、本州とは違う気候下にある北海道の特徴を活かしつつ、園芸種の展示場としての機能が強く、その点、英国のガーデンとの類似性をもつ。

2) 観光からみる北海道ガーデン

北海道ガーデンはほとんどが私設であり、観光地としての特徴が強い。訪問者は、庭を歩き、庭でレストラン・カフェを利用し、土産を購入して帰る。庭自体がその訪問目的となるのは同じだが、庭そのものも、滞在時間にあわせて、30分、1時間、2時間コースなどの設定をしている。入口・出口に土産物やカフェを設け、出発点から終着点に導くコースの在り方は、英国の庭園と同じである。しかし、National Trust や English Heritage、NGS の枠組みにより管理され

ている英国庭園と違い、樹木に関する説明、販売している土産などについては、各庭の個性が強くでている。北海道ガーデン街道を構成する8庭園については、共通のデザインによるファイルなどが用意されることで、「そろえる」という購買意欲が促進されるようになっている。一方で、純粋に庭のみで経営しているのは陽殖園（滝上町）のみで、カフェ、土産販売などもない。カフェや食事は麓の渓谷ホテルや道の駅を積極的にすすめており、庭の訪問は純粋に庭のみであり、訪問者は、帰り際に感想を書いて、庭師・オーナーの高橋武市と言葉を交わして帰っていくという特徴をもつ。

3) 北海道観光における景観

北海道観光において代表的な富良野のラベンダー畑や美瑛の丘などは、開拓者により創り出された景観である。また、北海道ガーデンも人が創り出す景観として、観光客を集客してきた。一方で、先住民であるアイヌ民族は、自然に手を加えないことを前提とした文化であるため、北海道は「神々の庭」といわれる大雪山系や、知床、阿寒湖などの触れられていない自然景観が残されてきた。現在ではこれら全てが北海道観光の対象であるが、北海道ガーデンは、1960年代からの造園業の発展を基礎として、独自に発展してきた樹種や花の栽培と、種苗販売、園芸部門とイングリッシュ・ガーデンが融合して創造されてきた独自のスタイルをもつ。「北海道ガーデン街道」として促進されてきた8つの庭園は、それぞれの個性を持ちながら、「北海道ガーデン」のイメージを人々に示してきた。北海道の自然と造園技術、そこに英国的要素が加わることで、他にみない庭園の展開がみられることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田代亜紀子
2. 発表標題 オーセンティシティを必要とするのは誰か：北海道遺産の事例から
3. 学会等名 上智大学アジア文化研究所「文化遺産の学際的研究」プロジェクト主催オンライン研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko TASHIRO
2. 発表標題 Who needs Authenticity?: A Case of Hokkaido Heritage in Japan,
3. 学会等名 International Conference on Humanities, Enacting the Studies of Language, Literature, History and Culture in the Digital Era", Organized by Andalas University, Indonesia（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Tashiro
2. 発表標題 Rethinking of Museum and Tourism: Cases from Asia
3. 学会等名 ACCU International Workshop 2020（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------